Title:「ちょっとそこまで。」





山本 友来
静岡のど田舎で生まれ、栃木、新潟、埼玉で人格を形成し、京都で青春を過ごしたのち、中国の武漢という街で修行を積みました。2007年より再び学生に。懲りずにちょっくら出かけてきます。

最近のエントリー

- 写真展終了！　40,41/183　4月27，28日 (2009.04.30)
- カンボジアに来て遺跡に行かない女　38～43/183　4月24日～27日 (2009.04.30)
- プノンペン　32～38/183　4月18日～24日 (2009.04.30)
- 4万の嘘　33/183　4月20日 (2009.04.28)

アーカイブ

- 2010年04月
- 2010年03月
- 2010年02月
- 2009年09月
- 2009年08月
- 2009年07月
- 2009年06月
- 2009年05月
- 2009年04月
- 2009年03月

投稿カレンダー

カテゴリー一覧

- Cambodia
- China
- India
- Japan
- Malaysia
- Nepal
- singapore
- Thailand
- Vietnam
- 旅の準備

ブックマーク

学校法人 日本写真芸術専門学校
NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE

OLYMPUS
Your Vision, Our Future

μTOUGH-6000

RSS 2.0

09.04.30

写真展終了！　40,41/183　4月27，28日

Tweet　Check

いつも出入国前後２日以外はそれぞれの取材地でバラバラに行動している我々４期生４人が、シェムリアップに集合しました。
雪の降らないこの町で、日本の雪景色の写真展を開催するためです。

今回会場を提供してくださったのが、スナダイクマエという孤児院です。

日本出発前から、大判プリントを台紙に貼り付けたり、学校のスタジオにポールを立てて展示のシミュレーションをしたりして準備をしてきたので、それほど大きな問題もなく、４人「仲良く」設営ができました。





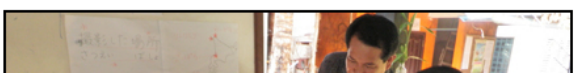




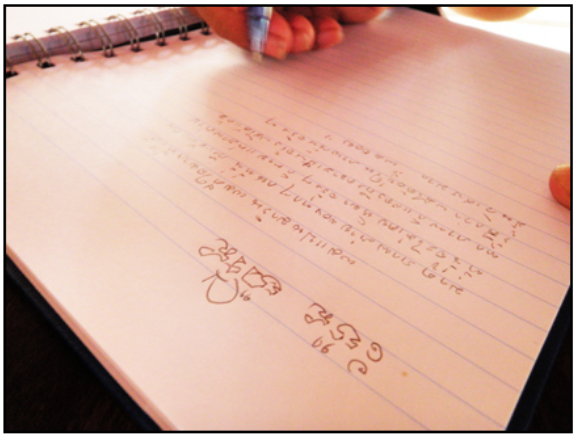
そして、写真展本番。

来場者のほとんどが７歳から18歳ぐらいの学生さんたちでしたが、皆さん雪やスキーなどに関する質問をしながら熱心に写真を観てくださいました。









半屋外だったのでスコールも心配でしたが、
幸い一時的な小雨だけですみました。
カンボジアに入ってから、ほぼ毎日バケツをひっくり返したような大雨に見舞われていたので、
これは奇跡的なことです！



来場者には、好きな写真の前でインスタントフィルムによる記念撮影サービスも行いました。



ご多忙の中、会場を貸してくださったスナダイクマエの職員の方々をはじめ、来場者の皆さん、
写真や設営資材の運送に協力していただいた学校フィールドワーク関係者の皆様、本当にありがとうございました。

カンボジアに来て遺跡に行かない女　38〜43/183　4月24日〜27日

Tweet　　Check



くどいようだが、日本人が「カンボジアへ行く」と言えば、それはイコール「アンコール遺跡群を見に行く」という意味だろう。

しかし私は今回、写真展開催のための集合場所であったシェムリアップで、遺跡をひとつも見なかった(唯一乗ろうと思った遺跡の見える気球は、風が強くて飛ばなかった）。
一度見たことがあるのと、自分の作品テーマにはあまり関係がないということ、何より日本を出発してからの一ヶ月間、ろくに休みもせず突っ走ってきたので、もともとシェムリアップでの時間は写真展準備以外の時間は丸々休養にあてるつもりでいたからだ。

同じ宿の宿泊客同士で、または路上で声をかけてくるドライバーたちとの間で、当たり前のように何度も同じ会話が繰り返される。
「○○遺跡はもう行ったか」「明日はどの遺跡に行くのか」
ほとんど挨拶代わりだ。
その度に「いや、今回は遺跡は行かないんだ」と答えるのは、「元気？」と聞かれて「ちょっと風邪気味で」とわざわざ答えているような気分になるので気がひけるのだけれど、この町にいる以上、どこへ行っても聞かれるのだから、仕方がない。

遺跡が主役。観光が主役。
そういう町なのだな、と思った。

目立つのは観光客と、高級車、高級ホテル。
４階建てに統一され、きれいに並んだピカピカのマンション群からは一切の生活感が閉め出されていて、どこかのテーマパークに迷い込んでしまったかのような錯覚をおぼえる。

押し寄せる違和感。
あからさまな拝金主義を見るのは気持ちのいいものではない。
しかしそれは清貧を美徳としてきた日本人の、あるいはお金で浮かれていた時代をどこかで恥じている日本人の、勝手な感想であるのだとも思う。

生活感を求めて、トンレサップ湖の水上集落を見に行った。





しかしここにあったのも、見せ物と化した見学コースだった。

旅が始まって12個目の都市に来て、はっきりとよそ者としての自分の立場と本当に見たいものとの壁を感じた。
何かほかにとるべき方法があったのかもしれない。
今はそれが何なのか、考えることしかできない。

カテゴリ：Cambodia
post by 山本 友来 | 日時: 2009.04.30 | パーマリンク | コメント (2) | トラックバック (0)

プノンペン　32〜38/183　4月18日〜24日

Tweet　　Check




日本人が「カンボジアへ行く」と言えば、それはイコール「シェムリアップに滞在してアンコール遺跡群を見に行く」という意味だろう。
首都プノンペンに行くことがあるとしても、せいぜい陸路でホーチミンに抜ける際に寄る程度だと思う。

観光客向けとは到底思えないプノンペンに前回観光客として訪れた時は何もすることがなく、時間をもてあました。記憶と言えば窓もない安宿のベッドにつけられた蚊帳の色と、小包の目方をごまかされた郵便局での腹立たしい気持ちぐらいだ。

そんな印象の薄かった都市に、６泊もすることになってしまった。
もちろんそれは自分で決めたことなのだけれど、正直に言うと、本当はラタナキリというベトナムに近い田舎の地域を撮るつもりで飛行機を取ろうとしていたら、つい１年ほど前にフライト自体がなくなってしまったことをプランニング最終段階で知り、仕方なくプノンペン滞在を延ばすことにしたという経緯がある。

結果的に言うと、６泊でも足りなかったぐらいだ。









人も、街も、すごい勢いで変わろうととしているのがわかる。
昔ながらの素朴さと、近年出て来た拝金主義の交錯。

それを写真で捉えるのは、決して簡単なことではないのだけれど。

目的のある旅というのは楽しい。


































カテゴリ：Cambodia
post by 山本 友来 | 日時: 2009.04.30 | パーマリンク | コメント (0) | トラックバック (0)

09.04.28

４万の瞳　33/183　4月20日

Tweet　　Check

8日遅れでお送りしています…。

～～～
4月20日。
キリングフィールドとトゥールスレン収容所を見学。


「歴史」と呼ぶにはまだ新しすぎる傷跡。





このような場所に来て、学ぶべきものあるいは
抱くべき感情というものがあるとするならば、
それは
特定の個人や政党や国家への憎しみではなく、
人間の弱さを嘆き、自覚することなんじゃないか、と思う。
思想であったり、権力であったり、体制であったり、何かに取り憑かれ狂わされてしまう、普遍的な人間の弱さを。

キリングフィールドでおびただしい数の実物のしゃれこうべを見るより、博物館の壁一面に貼り出された、レンズを見つめる悲痛なモノクロの瞳と対峙した時の方が心を揺さぶられた。
不謹慎な言い方かもしれないけれど、これらの膨大な写真が撮られていてよかった。残っていてよかった。

09.04.23

停電とスコールの街。30/183

Tweet Check

ネット環境が次第に悪くなってきております。
更新頻度が落ちていますが、元気でやっていますので御心配なく…

～～～
４月18日プノンペンへ。

今回のFWでは初の陸路による国境越えだ。
無秩序に人が押し合う機械の前でほぼ自己申告的にX線に荷物を通し（通さなくても素通り出来る）、
添乗員がまとめて預かったパスポートを（何のために預かるの？）出国審査のカウンター前で名前を呼ばれた順に受け取り（呼ばれる順番が予測不能なので並ぶに並べず押し合いへし合い）、カウンターを素通りした後で今度は一列に並んでパスポートチェックを受けるという、なんとも不思議なシステムで通過する（はじめから各自でカウンターに並んでチェックを受ければ一回で済むんじゃないの？）。

とりあえず、４年前逆ルートでベトナム入りした時、持っていた正露丸がその形状と臭い故に怪しまれて取り調べを受け、あやうく没収されかかった私としては、何事もなく通過出来ただけでひと安心である。

しかし「国境を越える」ただこれだけのことで緊張したり興奮したり記念写真を撮ったり通関システムに疑問を感じたりできるのは、国土を海に囲まれた、「国境慣れ」していない日本人ならではなのかな、と思ったりもする。
ベトナム→裏側はカンボジア





こんなに気持ちよく晴れていたのに



プノンペンにバスが着いた途端にスコール。







道路は川のよう。
濡れても平気なμTough6000があるので、大雨の中撮影を楽しむ。

ホテルに着くと、なんと停電。

この後、毎日一度はスコールに襲われ、１週間の滞在のうち9回も停電に遭遇するとは、思ってもいなかったプノンペン最初の夜だった。

カテゴリ：Cambodia
post by 山本 友来 | 日時: 2009.04.23 | パーマリンク | コメント (3) | トラックバック (0)

09.04.19

ホーチミン再び。29/183

Tweet Check



4月17日。
ホーチミン市内散策。

朝７時、公園はすでにスポーツや体操を楽しむ人達であふれている。



朝８時前、体育の授業を終えたばかりの男子中学生たちが路上で休憩中。





４区周辺。
新しい風景と古い風景が混ざり合う。

















お昼も近くなると、人が消える。
この暑さだもの。
若者はどこへ？？
発見。
カフェとか、本屋で涼むのね。





無防備に七分袖で歩いていたら、時計焼けしてしまった。
ホーチミン女性たちの美白への心構え、見習うべき？？





～～～
夜は、忙しい中二日も連続で４期生のために駆けつけてくださった１期生紺野先輩が、ベトナム人の若手写真家、ナムさんを紹介してくれました。
お二人ともプロとして活躍されています。
暑さに負けそうになりかけていたこの時期にお会い出来て、喝が入りました。
いただいたアドバイスも参考に、残り７カ国も頑張ります。
ありがとうございました！

カテゴリ：Vietnam
post by 山本 友来 | 日時: 2009.04.19 | パーマリンク | コメント (0) | トラックバック (0)

タイニンからホーチミンへ。28/183

Tweet Check

3日遅れでお送りしています。

4月16日。
タイニンから、指定泊ホテルのあるホーチミンへ。
ミニバスで移動しました。

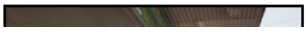
町から町の間を見られるのがバスの旅。
出発前日は何かと寝不足になりがちなので車内で寝ようと思っているのですが、
乗るとついつい窓の外が面白くて、写真を撮りたくなってしまいます。
移動中ならではの風景を窓からパシャパシャ。
（長距離移動時は一眼レフはカメラバックにしまいこんでいますが、こんな時にもポケットに忍ばせておけるのがコンパクトなμTough6000です！）













ホーチミン到着、タクシーに乗り換えると、突然のスコール！間一髪でした。



指定泊ホテル、なかなかステキでした。
が、写真をやってる者としては、気になって仕方がなかったのが額縁の曲がり具合。
水準器を乗せたくなりました。



09.04.17

気楽にタイニン。　25〜28/183

Tweet　　Check



外国人といえば、ホーチミンからの日帰りツアーで礼拝だけ観に来る観光客がほとんどのこの町。
泊まりがけ、しかも３泊、かつ（1度トモカの撮影に着いて行った以外は）観光名所には目もくれずひたすら町の中を撮りまくる日本人。
目立つ目立つ。









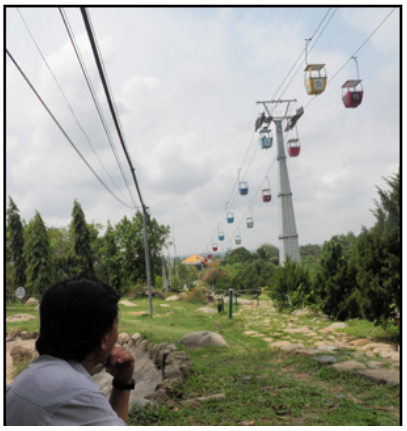


やっぱり田舎の人は何かと世話焼き。
この辺は英語が話せる人もちらほら。

ココナツジュースをくれたり、汗をふけとウェットティッシュをくれたり、ちょっと変わったネズミや三蔵法師のいる遊園地に連れて行ってくれたり。









４日目、自分ではかなり早起きしたつもりで身支度を始めていると、
６時過ぎ頃ホテルの電話が鳴る。

誰だ、こんな早くに！？
と思ったら、前日遊園地に案内してくれたおじさんがホテルのフロントに来ていた。

今日もどこか行きたければ案内するよ、とのことだった。
近くを歩いて回りたかったので丁重にお断りしたが、それにしてもすごい時間帯に訪ねてくるものだ。

せっかく外に出たのでそのまま撮影。
７時前だというのに、人、人、人。





公園で朝のスポーツを終え一休みしている学生３人組に話を聞くと、
なんと彼らは５時頃起きているらしい。
学校は７時から始まるそうで…
で、11時に一度終わって、長めの昼休み。
この暑さじゃ、それが効率いいわけだ。
たしかにホーチミンでも、昼間は閑散としていた通りが夕方になると人であふれかえっていたっけ。

町の様子を撮るんだから、現地の人と生活リズムを合わせなきゃ。
タイニンでは少々のんびりしすぎました。
まあ息抜きも大切ってことで。

ホーチミンでは頑張って早起きします…

カテゴリ：Vietnam
post by 山本 友来 | 日時: 2009.04.17 | パーマリンク | コメント (3) | トラックバック (0)

ちょっとそこまで。 > 2009年04月 アーカイブ

09.04.16

新興宗教の町。25/183

Tweet Check

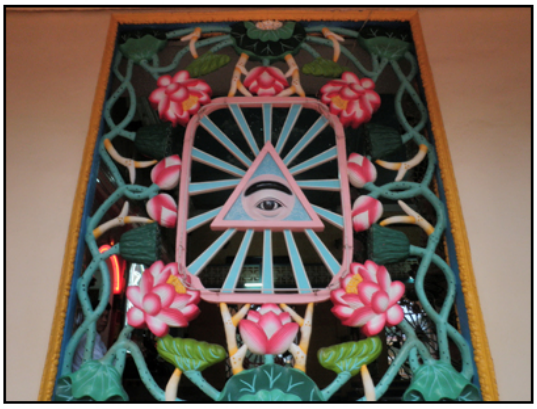
3日遅れでお送りしています。
4月13日～3泊4日。
ホーチミン市からバスで２時間（とされているが実際は３時間以上かかった）、カンボジアの国境に接するタイニン省の省都、タイニン市に滞在しています。
聖地を撮影テーマにしているトモカと合流、しばしの二人旅です。

タイニン省人口の3分の2とも７割とも言われる信者数を誇る、新興宗教カオダイ教の総本山。
キリストも仏陀もユーゴーもソクラテスも李白も全部同列にあがめてしまう、ちょっと変わった宗教です。
世界のあらゆる宗教を意識的に混合させているのが特徴。
そんなわけで建物の様式やレリーフも様々な宗教由来のものをかなり強引にチャンポンしていてとってもユニーク。



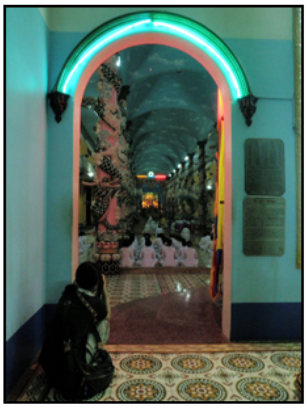


信者は主に白いアオザイを着ています。



詳しくは[トモカの記事]参照。

真剣に撮影するトモカ。



私はというと、その寺院の前の広場で遊んでる人達の方が気になるけれど。





たまには観光もいいものです。

09.04.15

生きる。23, 24/183

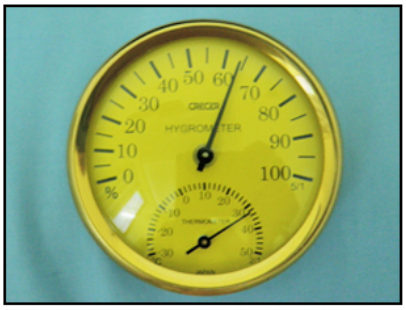
Tweet Check

4日遅れでお送りしています。

4月11日、ランソンからミニバスでハノイへ。そのまま飛行機でホーチミンへ。

ハノイでも、ホーチミンでも、タクシー代を若干ボラれる。
都会に戻って、せっかくどこでも英語で話ができて喜んでたら、このザマだ。
基本的にはこういうのは、自分の落ち度だと思っている。
腹を立てるだけ労力の無駄でもあるし、ボラれた分の金額を日本円に換算して、
日本でこれまでさんざんくだらない物にかけてきた多額のお金と比較し、
気持ちをおさめることにした。

ホーチミンは、とにかく暑い。
室内で、33度、湿度64%。



蒸し暑いけれど、２台の扇風機のおかげで、ランソンでは丸二日干しっぱなしでも生乾きだった洗濯物が、半日で乾く。



そんな環境で、一日４回シャワーを浴びている。
朝起きて１回、朝ご飯から戻って１回、撮影から戻って１回、寝る前に１回だ。
外に出ると、代謝の衰えた私のカラダでも汗を噴き出さずにはいられないらしい。
渇いたのどにキンキンに冷えた水を流し込むと、それがカラダのどこを通っているのかを感じ取れるぐらいだ。

ホットシャワーも使えるのだけど、ここはあえて冷水で浴びる。

この最高に気持ち悪い状態と最高に気持ちのいい状態を交互に体感し、
ちゃんと自分のカラダで生きてるってことを実感する。

こういう実感がほしくて、人はわざわざ険しい山を登ったり、戦場へ出かけていったりするんだろうか。
だとすれば、単に暑い中歩き回って帰ってくるだけのことでそれが得られてる私の、普段の生活の生温さって一体なんなんだ。





宿の周辺を歩いていると、２分に一度ぐらいのペースで話しかけられる。
「モトバイ？」（訳：バイクタクシーのご利用はいかが？）
「ネエチャン！」（訳：お嬢さん！）
「オハヨー」（訳：やあこんにちは）
そして観光コースをいろいろと勧めてきたり、行き先を尋ねてきたりする。
無視するのもなんなので、一言二言話してから、"No, thank you.**I like walking.** "と言えばたいていは引き下がってくれる。

日本語で話しかけてくる人は、もう少ししつこい。
日本人観光客からの紹介文的なメッセージがたくさん書かれた分厚い手帳を見せながら、ほら、私はいい人だ、みんなこんなに満足している、ということをアピールし続ける。
こうした観光客狙いの運転手や、それを利用したり、手紙を書く観光客に対して、いろいろ思う人はいるだろう。
けれど私は、自分の労働を少しでも高く買ってもらおうと、営業するのは自然なことだと思う（もちろん悪質な詐欺の場合を除いて）。
またお世話になった人に手紙や写真を送るのも自然な行為だと思う。
お互い気分良く過ごせたならそれでいいし、利用側に不満が残ったとしても、それはもう自分が選んだ責任としかいいようがない。

この陽気なおじちゃんも日本語ペラペラだった。
観光案内の誘いはお断りしたけど、しばらくお話だけさせてもらった。
「オッパッピー」やら「どんだけ～」やら、最新（よりちょい遅れ）の流行をばっちりチェックしている。
これは「ウィッシュ」の図。ちょっと違うような…



みんな、必死に生きているんだ。

カテゴリ：
post by 山本 友来 | 日時: 2009.04.15 | パーマリンク | コメント (3) | トラックバック (0)

09.04.12

Cám ơn, Na!　20～22/183

Tweet　　Check

ナーという女の子と出会った。

「女の子」と言っても私より２歳年上で、数え４歳の子供もいるのだけれども、歳の離れた7人の兄姉を持つ末っ子であることと、髪型とファッションが影響してか、だいぶ若く見える。
実際、初めて見た時は彼女の娘を妹だと思ってしまったぐらいだ。

彼女はこの小さな町で私が唯一出会った英語のできる存在だ。

この町に着き撮影を始めてから半日とはいえ、はじめて旅の孤独を味わい、正直まいっていた私。

中国国境付近だから中国語が通じるだろうとタカをくくっていた私を待ち受けていたのは、ベトナム語と片言の広東語の嵐。
時には中国人観光客相手のツアーガイドを横取りし、時には「中越翻訳」と書かれた看板の店に駆け込み、その場しのぎに泣きついて通訳をしてもらったけれど、いつも都合良くそんな助けが現れるわけではない。

出会う人は、みんないい人だ。言葉の通じない私に、とても親切に接してくれる。
もっと時間をかければ、きっと分かり合えるんだろう。
でも私には、この町で残された時間はあと3日。
言葉なしで何かを知るには、短すぎる。
せっかく好きになりかけたこの町を、もっと知りたい。

そんな時に現れたのが、ナーだった。

4月9日の昼下がり。
たまたま彼女のネイルサロンの前を通りかかり、外で遊んでいた彼女の娘が可愛かったので、ジ

ェスチャーで「撮ってもいい？」とやったら、思いがけず英語で話しかけられたのだ。

「飲み物でもおごらせて。」
という彼女の言葉に甘え、近くの喫茶店で話し込んだ。



"My English is poor."
と彼女は言うけれど、発音はきれいだし、私だってそんなに英会話が得意な訳ではない。
考えてから話し出すまでの間とか、話すスピードとか、なんだか私とそっくりで、テンポが合って話しやすかった。
どちらかがしゃべりすぎることも、聞き手に回りすぎることもなく、お互いの国のことや、自分のこと、結婚のこと、家族のこと、この町のことを語り合った。
その日の晩は、ナーの実家にお邪魔して、晩ご飯をごちそうになり、



夜の町を散歩し、また語り、
彼女の友達や夫と一緒にナイトスポットに連れて行ってもらった。



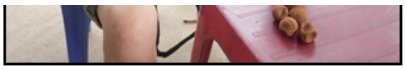
「明日はどうするの？」ときかれ、
予定通り「朝からDong Dang（中国国境にさらに近い町）に行く」と答えると、
「バスは難しいし、心配だから私もついていってあげる。」と言ってくれた。
さらに、「Tan Thanhていう国境ゲートのある町にも案内するわ」と。

私は撮影中は基本的に一人でいたいタイプだ。
お金を払ったガイドならともかく、友達なら申し訳なさすぎる。
気に入ったところでは何百カットでもしつこく撮りたいし、同じところを何度も歩いたり、シャッターチャンスのために何分も待ったりする。
きっとついて来る方は退屈してしまうはずだ。
でも、私が今回必要以上にナーに気を遣わずに撮影出来たのは、彼女が私の意図を分かってくれたのと、彼女が彼女なりに、小旅行を楽しんでくれたからだ。

私と二人で歩いていると、彼女まで外国人に見えるらしく、
声をかけられるたびに
「またそこの人達が、中国人かな、日本人かな、と噂してるよ。しばらく黙っていよう。」と小声でいたずらっぽく私に耳打ちし、外国人ごっこを始めた。

休憩の時に知りたい日本語を私から教わると、私の撮影中はずっと小さいメモを片手に楽しそうにぶつぶつ言いながら歩き回り、次の休憩までに完璧に覚えていた。
私の日本語教師時代のスキルのおかげ、と言いたいところだけれど、
やはり彼女の頭の良さが一番の理由だろう。







結局、私は残りの３日のほとんどをナーと、その友達や家族と過ごした。

昼間は撮影し、夜は彼女の夫、イーの実家でご飯を食べたり、いとこの家でデザートをごちそうになったり、深夜営業しているカフェで彼女の友達とおつまみを食べたり…

ベトナム式のカラオケは、個室が満室でまさかの相部屋！
ナーの一番上のお姉さんは、なんと元歌手ということで、とても上手い。
ナーも同じ血を引いているだけあって、よく通る素晴らしい歌声だった。
そして同じ部屋の先客は有名なテレビドラマの制作フタッフ御一行様。
30歳のフィルムディレクターがドラマの撮影現場を記録した写真をコンパクトデジカメの画面で何百枚も見せてくれたのだけれど、ただの記録用写真なのに、なんだか異様にウマい！
構図や光のバランスがしっかりしていて、一枚たりとも妥協がないのだ。
さすが映像のプロは違うな〜と感心して見入っていると、いつの間にか私の撮影データを再生し、構図のダメ出しを…さらには私の一眼レフをちょっといじってすっかりマスターし、そこらへんのものを撮って構図見本まで作ってくれた！
笑顔のステキな人で、数々のご指導もまったく嫌味がなかったのだけど、
さすがにこの照明の条件が悪い中、初めて触った他人のカメラでここまで上手に撮られてしまって若干へこんでいると、
彼も実はもと写真家志望で、専門的に写真を学んでいたのだと教えてくれた。



ナーのおかげで本当にいろいろな人と出会うことができた。



最後の夜は、ナー自身がひとりで手料理全品を用意してくれた。
ベトナムに来てから食べたディナーの中で、お世辞抜きでいちばんおいしかった。



結局、町の印象なんてものは、出会った人の印象で変わってしまうものだ。
そして、いい出会いをするということは、もちろん運の力が大きいのだけれど、
出会おうとしていなければ出会えないんだ、ということも、今は強く感じる。
一人で旅するということは、その気さえあれば、出会おうとできる一番いい環境なんだ。
だってそばに逃げ場がないのだから。
寂しかった一日目も、近くのネットカフェに駆け込まなくてよかった。
（結局ネットカフェにお世話になったのは、３日目の定時連絡の時だけだった）。
ナー、私はあなたに会おうとしてたんだよ、きっと。
Cám ơn, Na!
I really had a good time staying with you.
I'll never forget you and the people of Lang son town!
Dai –suki!!



カテゴリ：

post by 山本 友来 | 日時: 2009.04.12 | パーマリンク | コメント (7) | トラックバック (0)

09.04.10

18歳に見られる私（フジワラ風）20/183

Tweet Check

写真への不安は、旅への不安と比例するのだろうか。

ハノイでは撮影中に全メモリーカードを使い果たしそうになって急遽データをHDDに移しにホテルに戻ったぐらい撮れていたのに、ここランソンで迎えた撮影初日の午前は、カメラを持って歩き始めてもなぜか気分が乗らなかった。

気温は薄手の長袖でちょうどいいぐらいの快適さ、朝ご飯もおいしかったし、睡眠も十分すぎるぐらいとったのに、カラダは「座りたい」と言っている。

大通りの真ん中の噴水の縁に腰掛けると、昨日までにあった嫌なこと、写真のこと、この町のこと、将来のこと、いろいろな考えが浮かんできて、ますます動けなくなった。

そのまま1時間ほど一枚も撮らず,
浮かんでくるとりとめのない考えをメモに書き留めたりして座っていると、
通りの反対側から手招きしている人がいるのに気付いた。

写真館のおじさんと宝くじ売りのおばさんだった。
日本から持ってきた某イラスト付き会話本を使って、なんとか自分は26歳の日本人で、昨日ランソンに来た、11日にホーチミンに行く、ということがわかってもらえた。

肖像写真館のおじさんは私の一眼レフに興味津々で、値段を聞いて納得した表情を見せたり、試し撮りをしたり、私が朝からそこに座るまでに惰性で撮ってきた量も内容もない写真を再生して眺めたりしていた。

会話本の使えるフレーズも早々に尽きて、写真館にも宝くじ売り場にもお客が来たので、何枚か写真を撮らせてもらって、おいとますることにした。

少し気分は軽くなっていた。



歩き出すと、いたるところで声をかけられる。
そして必ず、そばにいる誰かを引っ張ってきて、「コイツを撮れ」と言う。
何を言っているのかはなんとなくわかる。
「中国人か？」「日本人でしょ」「一人で来たのか？」たぶんそんなところ。
例の会話本を出して、さっきと同じ会話をくりかえす。
「20歳ぐらいか？」
ベトナムでは歳は数えを使うから、20歳は日本でいう18、19歳。
韓国でも台湾でもハノイでもそうだったけれど、年齢を言うと、必ず驚かれる。
そして、独身らしい男を連れてきて、コイツと結婚すればどうかと言う。
なんだ、みんないい人たちじゃないか。







歩き回ってへとへとになって、食べ物屋が見つからなくてうろうろしていると、道ばたで果物を売っている家族に出会った。
ちょうどご飯中の彼らが一緒に食って行けと言う。



胃腸には自信があるけれど、スプライトのペットボトルに詰め替えられていた水だけは口をつけるふりだけして、飲まなかった。
なんだかうしろめたかった。




数え27歳のお嬢さんがジェスチャーと例の会話本と「片言」レベルにも達しない英単語を駆使して大真面な顔で「日本へ連れて行って」と言った。
冗談なのか本気なのか、確かめる術がなかった私は、通じないとわかりきっている英語で、
「あなたがパスポートとビザを持っていたら、ぜひそうしたい。」と言うことしかできなかった。
彼女は自分の言ったことが通じていないと思ったのか、何度も「連れて行ってほしい」と言って、最後にはあきらめて、「今夜うちに泊まっていって」と言った。

「そうしたいけど、ここからけっこう離れたホテルをとってあるの。大きな荷物もそこに預けてあるし、夕方には定時連絡のメールをしなくちゃいけないの。泊まる訳にはいかないから、今ちょっと遊びにいくだけじゃだめかしら？」
さて、これだけのことを伝える術が、今の私たちの間にあるだろうか。いや、ない。

イラスト会話本のページをさがしても、
「今」が載っていない。「荷物」が載っていない。
「夜は帰らなければならない。」せめてこれだけ言えれば通じるのに、どう頑張ってイラストを組み合わせても、表せそうにない。
仕方なく、首を横に振りながら「ホテル」を指差した。
「私はホテルに泊まりたいんだ」と解釈されただろう。
彼女を傷つけていないか、心配だ。



そして、この直後、新たな出会いが。

つづく。

カテゴリ：
post by 山本 友来 | 日時: 2009.04.10 | パーマリンク | コメント (7) | トラックバック (0)

09.04.09

Lang Son、序章。19、20/183

Tweet Check

中国国境にほど近い町Lang Son。



4月7日。

ハノイのバスターミナルで、一緒に来たトモカとしばしの別れを惜しむ間もなく強引にミニバスに乗せられる。
バスを降り立つとこれまた強引にバイクに荷物を積まれ、さらに相当な遠回りをされて、あげくに事前にバスの同乗者から聞いていた相場の８倍の値段を吹っかけられ、モメにモメてようやく

着いた宿のスタッフは誰一人英語が通じない。
なんとかチェックインを済ませると、疲れ果てて、食事もとらずに眠りについた。

4月8日。

午前８時過ぎ。激しくドアをたたく音で起こされる。
ジェスチャーからすると、とにかく降りてこい、と言っているらしい。
急いで着替え、パスポートと現金とクレジットカードの入ったセキュリティーポーチだけを身につけてフロントに降りると、ご飯を食べてこいとのジェスチャー。
そのまま追い出される。

そうは言われても細かいお金は前日に使い果たしている。
歩き回って国際カード対応のATMを探すも、見つからない。
「中越翻訳」と漢字で書かれた店を発見し、中国語で助けを求めると両替おばさんを紹介してくれたけれど、かなり悪いレートを要求される。
仕方なく少額を替え、朝ご飯を食べてホテルに戻ると、

なんと入り口にカギがかけられている！

一体いつまで待てばスタッフが帰って来るのか。
客は私だけ。
もしかして夜まで帰ってこないんじゃないのか。

カメラさえあれば、いくらでも時間をつぶせるのに…
せめて紙とペンがあれば、日記でも書いて待つのに…
近所の人とジェスチャーで会話してみるも、もたない。
なんて無力な自分。

結局彼らは30分ほどで帰ってきたけれど、前日からのマイナス要素がたまっていたせいか、気分が晴れない。
考えてみれば、外でも宿でも全く言葉が通じない、通信手段も何も持たない環境にたった一人でいるのは、これがFW初、いや、生まれて初めてだ。

みんな笑顔で接してくれるのに、ご飯の値段も、バスの値段も、現地の人が払っているのと本当に一緒か横目で確認してしまう。
人を疑いながら過ごすのは、気分がよくない。

そんな、第一印象最悪だったこの町。









つづく。

カテゴリ：

post by 山本 友来 | 日時: 2009.04.09 | パーマリンク | コメント (1) | トラックバック (0)

09.04.06

コツはゆっくり。17,18/183

Tweet Check

バイク天国、ハノイ。





しかし、何かが違う。
そう、私が４年前に見たベトナムは、「ノーヘル」天国だった。
2007年12月に開始されたヘルメット着用義務化は、意外なほど浸透している。
ヘルメットに関しては10年以上前から再三着用が呼びかけられていたけれど全く定着しなかったそうだ。
今回は厳しい罰金が課されたということで、着用率はなんと99%！（ベトナム運輸省調べ）
バイクタクシーも必ずお客用のヘルメットを用意している様子。

しかししかし、運転マナーは相変わらずだ。
クラクションはすでに意味がないぐらいに鳴りっぱなしだし、「歩行者優先」なんて考え方は全くない。
日本式の待ち方では何時間待っても道を渡れない。
とにかく、足を踏み出すことだ。
バイクが迫ってきても、走ってはいけない。
それは逆に危険行為。
ゆっくりと歩いてさえいれば、向こうがよけてくれる。



自転車もけっこう頑張っている。



そんなハノイ。







明日から中国国境付近のランソンへ。
さらば都会。

カテゴリ：
post by 山本 友来 | 日時: 2009.04.06 | パーマリンク | コメント (3) | トラックバック (0)

09.04.05

人山人海　15,16/183

Tweet　　Check

台北入りしてからは、連日「西門町」という「台湾の渋谷」とか「台湾の原宿」と言われている繁華街をうろうろしていました。
週末ということもあり、お昼過ぎにはかなりにぎわっていました。

日本では定額給付金が賛否両論を呼びましたが、ここ台湾では一足先に「消費券」という商品券が政府から全住民に配られています。
定額給付金と違うのは、現金ではなく使用期限付きの商品券であり、預金、現金化も出来ないということ。
使用期限は今年末ということで、西門町に立ち並ぶお店にも「消費券の使用歓迎します」といったポスターがあちらこちらで見られました。



実際に経済効果もあらわれているそうです。





二日間でずいぶんと人に声をかけましたが、
たいてい「一目見て日本人だとわかった」と言われます。
私は「すごく日本人っぽい」のだそうです。
それは自覚してたのですが、私から見ると台湾人はけっこう日本人に近いイメージだったので、
「あなたは私たちと全然違う」と言われてちょっと意外でした。

さて夜は台湾最終日ということでみんなそろって士林夜市に行ってきました。
これまたすごい人人人。
私の大好物の「臭豆腐」は大不評でした。
私には物足りないぐらい臭いのないお店のを選んだのに…





カテゴリ：

post by 山本 友来 | 日時: 2009.04.05 | パーマリンク | コメント (3) | トラックバック (0)

09.04.03

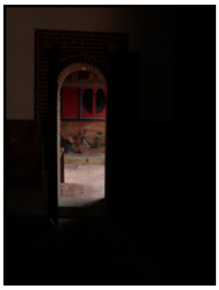
ハイテク金門からアナログ台北へ。14/183

Tweet Check

金門はほんとうにいいところだった。
風は強かったけれど、暑くもなく、寒くもなく。
人は純朴で。
でも時間には意外ときっちりしてて。
全島どこでもインターネットが使え、
コンビニには高雄と同じ物が同じ価格で売られていた。
20代～40代が少ない島。
「卒業したらどうするの？」という私の問いに
「台湾（本島）に進学する！」と迷いなく答えた女子高生たちは、
いつかこの島に戻って来るのだろうか？








～～～～
4月3日。
空港まで送ってくれる約束のオーナーさんがフライトの時間を勘違いしていて
あやうく乗り遅れるところだった飛行機は、行きと同じ80人乗り。



荷物はあんな風に積まれていたのか。

それにしても。
搭乗案内も機内のアナウンスも、北京語と閩南語のみだった。
行きの便は英語も使ってたな。明らかなアラブ系が乗ってたからかな。
今回だって少なくとも外国人のパスポートが一つはあることを確認してるはずなんだけど。

約１時間で台北松山空港に到着。
予約していたゲストハウスまでは交通費をケチって路線バスを利用した。
ここで意外なカルチャーショックに遭遇。
たまたま細かい小銭がなかった私が運転手に尋ねると、「後ろで替えてくれ。」との答え。
両替機があるか車掌さんが乗っているのかと思い、きょろきょろするも、どちらも見当たらない。
「後ろでって、どうやって両替するんですか？」ともう一度訊くと、
何を言ってるんだこの子は？といった顔で「他の乗客がいるだろう」と言われ、
意味が分からずおろおろしているとしびれを切らせた彼は車内マイクで
「どなたか50元が崩れる方いませんか？」と一声。
すると乗客が一斉にごそごそと財布をあさり始める。

「えっ？そんなシステム？？」
都会だけれど、なかなか人間臭い台北の夜。



カテゴリ：
post by 山本 友来 | 日時: 2009.04.03 | パーマリンク | コメント (0) | トラックバック (0)

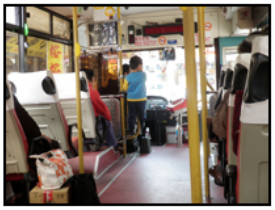
金門の人々。　13/183

Tweet　　Check

4月1日。
宿の居心地がよすぎるというのもまた問題で、
ついつい夜ふかししてしまい、朝寝坊。
「早起きができない人は写真家には向かない」（by鳥原先生）という言葉を思い出して、
慌てて支度をする午前１０時。
オーナーさんがそっと用意しておいてくれた朝ご飯金門名物広東粥をお決まりの油条（ヨウティアオ＝中華風揚げパン）と一緒にいただく。
ちなみにこの民宿では金門銘菓「貢糖」も食べ放題。



この日は泊まっている民宿からちょっと離れた別の集落へ。主な目的は学生ハント。
今いる所には、昼間は赤ちゃんとお年寄りしかいないので。



時刻表が不親切で、バス停もわかりにくく、地元の人しか「乗れない」1、２時間に１本のローカルバスを待ち、乗客の視線を浴びながらとろとろ揺られて着いたのがお昼過ぎ。

まずは小学生に遭遇。
「授業ないの？」
「まだ行かない。」
「何時に行くの？」
「３時。」
「朝は授業あったの？」
「あった。」
「お昼休み長いから、お家でご飯なんだね。台湾の学校はどこもそうなのかな？」
「知らない。」
「私、日本から来たんだけど、写真撮ってもいいかな？」
「…！いいよ。」

男子中学生は、恥ずかしがる。
「え…？コイツらと一緒でいい？あっ、こらっ逃げるなって！」

女子高生は、興味津々。
「日本人？生まれて初めて会った！色白ーい！小さくて可愛い！！どこに泊まってるの？なんで中国語話せるの？あの面倒くさいバスに一人で乗ってきたの？すごい！えっそんなに年上に見えない！私たちの携帯でも一緒に写真撮っていいですか？？」

言葉でコミュニケーションがとれるのは、やはり強みだ。
相手を知ることができるというのももちろんだけど、なんというか、結局はとっつきやすさだ。
韓国ではこうはいかなかった。

特に子供は英語も通じないし、なおさら困った。
あいさつして、自分が何者かを名乗って、年齢を訊くぐらいで終わり。
それで撮れる写真が劇的に変わる訳ではないけれど、気持ちの面で、ぶつかりやすさが全然違う。

でもだからといって完璧に言葉の通じる日本で臆せずパンパン人を撮れるかと言ったら、そんなことは全然なくて、むしろもっと大きな勇気と強いモチベーションがいる。
拒否されることへの恐怖は、日本での方が強い。

それはどうしてなのか。
旅は人を大胆にさせるのか。
日常から「撮影モード」への切換えが、もともと「非日常」である旅の方がしやすいからなのか。

どちらにしても、「気持ちの問題」。

なんてあやふやなものが私を支配しているんだ。









夜, 民宿のお隣さんにお別れを言いに行くと、そのお隣さんの家の晩ご飯に呼ばれた。



10人以上の大家族。
はじめは２歳のお子さんの写真しか撮らせてくれなかったけれど、
撮った写真や動画を見せてあげたらみんな喜んで撮らせてくれるようになった。
撮られるのが嫌だったのではなく、「あなたのフィルムを無駄にしたくない」という遠慮だったようだ。
デジタルはこんなところでも便利だった。
写真を送ってあげると言ったら、パソコンがないから友達のメールアドレスに送ってほしいという。
「一枚でいいから。」と言う彼らに「いいのがあったら何枚でも送ります」と言うと、
「データを送るのにもお金がかかるだろう？」と彼ら。
「タダで送れるんですよ」と言うと、「じゃあ全部送ってほしい」と。
やっぱりデジタルは便利だった。

09.04.02

大金門、小金門　12/183

Tweet　　Check

3月31日。
金門島から船で20分ほどのところに、「小金門」（または「烈嶼」）と呼ばれる少し小さめの島がある。
たかが20分、されど20分。
ブランコでも酔う私は、11月に行った小笠原諸島母島、１月に行った利尻島、そしてFW出発時の大阪ー釜山間と、お世話になった酔い止め薬を念のためとかばんに忍ばせ果敢に乗船する。
しかしこの季節、風が非常に強い金門の海。
乗った瞬間服薬を決意した。

酔い止めが効く前に小金門島に着いてしまうとすぐに、威勢のいいおばさまに声をかけられる。
彼女はタクシーの運転手兼ガイドで、1000元（約2900円）で島の見所を全部案内するからチャーターしないか、とのこと。
基本的にいわゆる観光名所には用はなく、できれば自分のペースで町中を歩いて回りたい旨を伝えると、
「歩くなんて、とんでもない！ここは大金門とちがって、公共の乗り物も道路標識もないのよ！アナタここは初めてなんでしょう？だったらなおさら無理ね。タクシーは便利よ。どこでも撮りたい所で停まって、撮影も待っててあげるから。絶対損はないわ！」
と地図を片手にまくしたてる彼女。
それもそうかと考えて、800元に値切ったらあっさり交渉成立。
今思えばもっと安く出来たかも？
こうなったらとことん役立ってもらおうと、気になったことはどんどん質問することに。
さすが、資格を持ったガイドだけあって、人口から島の歴史、細かい数字まできちんと答えてくれる。
やはり解説付きの旅は勉強になる。



「手前に見える島は台湾領、奥に見えるビル群は中華人民共和国領のアモイ。６kmしか離れていないの。」



「小金門にはかつて軍用道路だった道が何本か残されていてね、戦車が通るからこのような形状になっているのよ。」

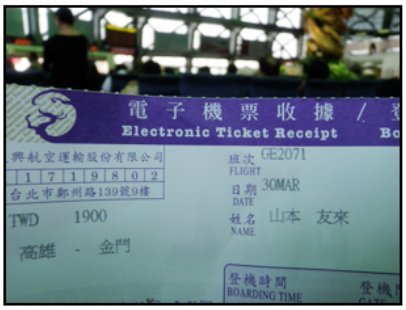
でも、彼女が一番役立ったのは、仲介者としてかもしれない。
金門の人達は、ほとんどが閩南語母語話者。
私が話せるのはいわゆる北京語（台湾では「国語（グオユィ）」という）。
彼らは「国語」も話せるけれど、なまりがきつくて、お年寄りなど人によっては全く何を言っているのかわからない。
高雄や大金門では、「国語」教育を小さい頃から受けている若い人が通訳になってくれたけれど、小金門で若い人達は全く見かけない。
それは気のせいではなくて、島内には就職口もなければ学校も中学までしかないため、若い人達はみんな台湾本島や福建、マニラなどに出てしまい、残るのは教育が無料で受けられる12歳までの子供と、月8000元の年金がもらえるお年寄りだけなのだそうだ。
ガイドさんも母語は閩南語だけれど「国語」もほぼ標準語だったし、島の人とも顔見知り。ついでに世話焼き。
撮影交渉の際、相手が尻込みしていると、「日本から来た記者よ。協力してあげて。」（記者というと納得しやすいらしい）と得意げに割って入り、説得してくれた。
（もちろんしっかり提携のお土産店に連れて行かれ、しっかり特産品のお菓子を買わされたりもしたのだけれど）。

撮影の技術というのは、つくづく機材の操作だけではないのだ、ということを思い知らされる。
被写体にたどりつくまでの諸々の困難を乗り越える術をいかにして用意するか、それも写真家にとって必要不可欠な能力なのだ。（その点で、フジワラの甘え上手は私には実は羨ましいのだけれど。）
私はこれまで国内で撮影していても、たなからぼたもち的に協力者が現れることが多かった。
そして今回もまた協力者が向こうからやってきてくれた。
でもそれは、思い返してみてもただただ運が良かったのだとしか言いようがない。
限られた旅程の中で、いつも運だけを頼りにしているわけにはいかない。
人脈作りと言っては聞こえが悪いけれど、計画的に人とつながっていくことにも、もっと積極的にならなければいけないのだ、きっと。

一人暮らし@金門　11/183 ～

Tweet　　Check

3月30日。
高雄を単身出発し、目指すは離島、金門島。



チケットはFW出発前に、台湾の予約サイトで格安（若干ですが）航空券を発見したのでクレジット購入済。便利な世の中です。
チケットの名前が漢字表記になっていました。
外国人はパスポートで身分証明を行うので普通アルファベット表記になるはずですが…
国内線はアバウトなようです。



飛行機は80人乗りの小型機。約50分であっという間に到着です。

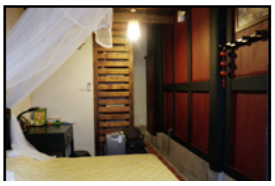
とはいえ、金門島は台湾本島から遠く離れた限りなく中国大陸に近い所に位置しています（中国支配領域からの最短距離はわずか2kmほど！）。
中国の国共内戦の折に国民党側がギリギリの所で死守した島で、地理的には福建省のその他の島々の一部ですが、現在も台湾政府が実効支配しているのです。
辺境巡りをしている私にとって、かつての内戦最前線だったこの島は非常に興味深い場所であります。

前日に電話予約しておいた宿のオーナーから、
迎えに行くから着いたら電話して！
と言われていたので試しに空港でPCを取り出し、スカイプアウトで電話（シムラは月ごとの定額制にしたみたいですが、私は1500円分のプリペイドです。色々な国で電話する機会のあるFWにはこっちの方がおトクなはず。）。
つながりました。
なんでも金門島は、島内ほぼどこでも無線のインターネットが使えるらしいです。便利！

さて、私が選んだ宿は一般的なホテルやゲストハウスではなく、「四合院」と呼ばれる伝統的な建築様式の「民宿（ミンスー）」の一つ。
観光目的ではないので、島のあちこちに散在する独特なお寺や名物守護神「風獅爺」見物は絵はがきや現地のガイドブックで堪能することにして、せめて宿だけでも観光気分を味わおうという魂胆です。











ギリギリの予約だったので心配でしたが、今は観光シーズンではなく、そもそも少人数しか泊まれない民宿は、団体旅行が多い中国、台湾客もめったに利用しないそう。
私が日本人だと知って、「一体どうやってここを知ったの！？」なんて驚かれてしまいました。
(確かに金門は安宿情報めちゃくちゃ少ないです！)
というわけで宿泊客は私一人。
オーナーも別宅住まいなので、このステキな民宿を４日間まるまる一人占め！
「自分の家のように使ってね」というオーナーのお言葉に甘えて、
晩ご飯は自炊（？）



つづく…

台湾入境　高雄にて　9/183〜10/183

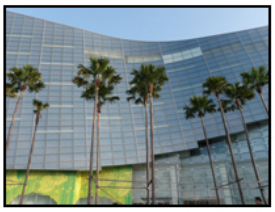
Tweet　　Check

韓国はあまりにも駆け足で過ぎ去って行った。
旅のスタートとしてはまずまず。
人は親切、物に不自由はなし、食べ物もぱっちり口に合い、
何も考えずに突っ走ってきた。
休みなく過ごしてしまったので、次の高雄での指定泊の間は、ゆっくり休憩することにした。

3月28日夜。
空港を出た瞬間の、湿気と生暖かさと独特の調味料のにおいを帯びた空気に、韓国に着いた時にはあまり感じられなかった「異国感」を感じた。
６年ぶりに訪れた台湾。
記憶を呼び覚ますのにいちばん敏感な感覚は、嗅覚なのではないか、と思う。

しかし。
高雄は都会だ。
ショッピングセンターはスターバックス、コールドストーン、スガキヤ、ニトリ、無印良品、ダイソー…日本にいるのとなんら変わらない。
人だけ見れば、ファッションも、髪型もメイクも表情も、韓国人よりむしろ台湾人の方が日本に似ている。
テレビのバラエティ番組も、日本にそっくり。
ニカ国目にして、すでにあまり新鮮さを感じなくなっている自分に、少し焦る。
それは、自分に中華圏の滞在経験があるから？
韓国で飛ばしすぎた疲れ？？
旅への慣れ？？？

去年まではここが一カ国目だったのだ。
今年もそうなら、何か違っただろうか？







Copyright 2009 All rights reserved NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE
powered by OLYMPUS